シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

発想を変え佐渡を醸す　学校蔵プロジェクト（新潟県佐渡市）

日本で一番夕日がきれいな小学校〟と謳われながらも2010年に廃校となった旧・西三川小学校。2014年、木造校舎は、学校蔵としてよみがえった。

佐渡市真野新町にある1892年創業の「真野鶴（まのつる）」。「米」「水」「人」に、それらを育む「佐渡」を加えた「四宝和醸（しほうわじょう）」を掲げ、佐渡の自然と文化を活かした酒造りを行い、新潟初の酒蔵見学を始めた蔵としても知られる。

5代目蔵元、尾畑酒造株式会社　専務取締役の尾畑留美子（おばたるみこ）さん（53）は、2014年から、廃校となった旧・三川小学校を活用し「学校蔵プロジェクト」に取り組んでいる。中でも「学校蔵の特別授業」は、毎年、100人超の生徒が全国から集まる。何が人々を佐渡島へ向かわせるのか、県内外の廃校利用、地域活性化を考える人たちの視察、取材は後を絶たない。「一目惚れした廃校を残すために、蔵元としてできることをやっているだけ。地域貢献につながっているなら嬉しいが、それはあくまでも結果」と話す尾畑さんから、プロジェクト、佐渡への想いなどを伺った。

「ここにしかないもの」を探そう

尾畑さんは東京の大学卒業後、映画会社の宣伝プロデューサーとして活躍。1995年、家業を継ぐ決心をし、現在、尾畑酒造の代表取締役社長を務める平島健（ひらしまたけし）さんと結婚し佐渡に戻る。しかし東京とは全く時間の流れが違い、思い描いていたように仕事は進まず、悶々とする日が続いていた。

2002年、まず自分の行動を変え、「うちの酒蔵の酒を米国人に飲んでもらいたい」という夢を実現するため海外輸出に乗り出した。

すると「東京をゴールにしない」と発想が変化し、さらに「酒の魅力は生産地の個性」ということに気づき、佐渡島の「ここにしかないもの」探しが始まる。そして、2010年夏、健さんから、真野湾の丘に夕日を浴び日本海に望む旧・三川小学校をみつめながら、「学校蔵プロジェクト」構想を告白され、「出会ってしまった。これは、やらねばならぬ」と覚悟を決める。

毎年、海外で酒セミナーを行い新潟清酒、佐渡のこと、真野鶴を紹介する尾畑さん。写真はティスティング後の記念撮影。「真野鶴・万穂」は、日本はもとよりアメリカのワインジャーナリストからも大絶賛を受けている。

未来を変える「特別授業」

「学校蔵プロジェクト」※の柱は4つ。佐渡産酒米100%の「酒造り」。一週間の仕込み体験ができる「学び」。自然再生エネルギーを酒造りに導入し賄う「環境」。そして「学校蔵の特別授業」を行う「交流」。

「特別授業」は、尾畑さんが中心となり、企画・マネジメントしている。「佐渡から考える島国ニッポンの未来」を大テーマに、『里山資本主義』の著書で知られる藻谷浩介（もたにこうすけ）さん、「希望学」の研究者、玄田有史（げんだゆうじ）さんなど著名な講師の講義が続き、最後に、「生徒総会」という佐渡高校の生徒の研究発表をもとに全員が参加するワークショップを行う。

多様な人が一緒に学ぶことによって化学反応が起きる特別授業

授業は無料、年齢制限なし、子連れOK、学校までの送迎なし。ただし、参加目的などを事前にレポートで提出してもらう。何で佐渡まで行くのかを「思い返す」作業は、各人のふるさとへの想いに重なり、授業はその答え探しにつながっているようだ。尾畑さんは、レポートを何度も読み込み、ここは、この人に発言してもらおう、あの人は今しゃべりたいと思っているのでは？と考え進行する。

「16歳から70代までの人が集まり議論することで化学反応がおきる。子供たちの眼がキラキラと輝き、大人も触発される。アクションが変わることは、未来を変えることにつながる。将来、佐渡の課題解決の原動力になるかもしれない」とこの事業をはじめて良かった、続けていきたいと思う。

※詳細は『学校蔵の特別授業』
（尾畑 留美子著／発行・日経BP社・2015年）

心の声を聞く

地域の中で自分が何をしたらいいのか迷っているなら、何も考えずまちを歩いてみるとか、祭りに参加してみるとか、まず動いてみるといい。よく「目標設定」が大事だと言われるが、そういった言葉に惑わされず、自分の感性にあったものをつないでいくと、ぼんやりしていたものが何となく見えてくる。心の声を聞き動けば、自分が探しているものに出会えるのではないか。

お酒の味も、蔵元のパーソナリティが反映されていることに最近気づいた。「学校蔵プロジェクト」をとおして、私たちが何を考えているかを伝え、うちの蔵の酒を感じてもらいたい。

人は集まる

人口減少や高齢化を悲観的に考えていない。歴史的に見ればベストな人口は考えようだと思う。人は「何かおもしろいことをやっているな」と感じると集まってくる。本気でやっている人を見ると応援したくなるものだ。前向きなエネルギーを持っている人の周りには、同じような人が集まって来る。お互いに刺激し合い、何か創り出そうとする。佐渡には今、そういう、“佐渡でしかできないこと”をやろうとする人が増えている。

「佐渡はリーダーがいない、まとまっていない」と言われることが多いが、「まとまっている」というのは、短期的に見ると強そうに見えるが、長期的見れば変化に弱いとも言えないか。

多様性を持ち、いろいろな人とゆるくつながっていることが大事。何かのアイデアに出会った時に異なるものを掛け合わせることで、新しい価値が生まれる。自分が出来ることを磨いておくことが、結果、誰かの役に立つことにつながる。

佐渡に住んでいる人が、「いいところだ」と自慢し楽しく暮らしていると、外から来る人は「住んでいる人が言うのだからきっと良い所なのだろう」と輝いて見える。

「佐渡の里山に飛ぶ朱鷺を見たい、酒蔵を廻りたいなど『佐渡通い』をする人を増やしたい」と語る尾畑さん。「小さな一歩を踏み出したからこそ、見える景色がある」と結ばれた著書は、映画を観るような感動があった。

今後、佐渡、「学校蔵」でどんな物語が展開されるか楽しみだ。

春の学校蔵

【取材協力・写真提供】尾畑酒造株式会社
新潟県佐渡市真野新町449
TEL:0259-55-3171　FAX:0259-55-4215
https://www.obata-shuzo.com/home/